

現代の精神分析家にとっての空想すること

中 谷 桂 子

はじめに

筆者は心理療法において、治療者がさまざまなことを思い巡らす行為を「空想すること」¹⁾として定義づけ、精神分析学派の理論の変遷とアクチュアリティの視点から治療者が空想することを考察する有用性について先に論じた(中谷, 2021)。

精神分析学派では、治療者が空想することはこれまで逆転移²⁾の文脈で捉えられてきた。しかし、それぞれの治療者の逆転移に対する認識によって、治療者の空想への意味づけが異なったものになる。例えば空想は治療者の抵抗が表現される方法の一つであるという見方(Greenson, 1967)や、空想は願望が明示されるとともに防衛が表現される過程でもあるという視点(Witham, 1999)、空想は、経験の構成を具体的な知覚的イメージに描き、心理的機能の領域を補助するものであるという考え方(Stolorow, 1989)などが存在する。また抵抗や防衛のみならず、クライアントへの共感を促すものとして、治療者がイメージを広げていくために空想を使用すること(Berger, 1987)や、投影同一化によって空想が活性化されることも考えられる。それらは逆転移と区別されることも、区別されないこともある。すなわち治療者の空想はあらゆる心的作業のプロセスに関係しており、さまざまな観点から捉えられる(中谷, 2021)。

しかしながら、治療者自身の空想そのものに焦点づけた研究は、これまでほとんど見られていない。但し、1990年代になって、空想という言葉で表現されているわけではないが、精神分析家が精神分析治療の中で空想することにより生じていることを分析家の心の動き

-
- 1) 治療者の面接場面における空想体験を論じる上で、筆者は「空想」を「独自性」と「連続性」の2つの視点によって定義づけた。空想するという行為は、時間の流れの分割が不可能であることから、どこまでを「空想」とするのか、その心的作業の範囲が不明瞭である。治療者の思いを巡らす行為とは、空想の「連続性」を表現していると考えられる。
 - 2) 逆転移の概念は治療の邪魔になり、自己分析によって克服すべきだという Freud (1910/2007) の考えから、その後、逆転移を好ましくないという見方が変化した。さらにアメリカにおける精神分析のパラダイムの変化により、間主観性理論や関係論という二者の相互交流や関係性を重視した理論が登場した。そうした流れの中で、転移-逆転移関係という表現も増え、共転移 *contransference* (Orange, 1995) という概念や、一者心理学的な捉え方である逆転移という言葉自体を使わないという傾向すら出てきた。そして、現在は学派によって多少の違いがあるものの、逆転移は治療者側のものというより、患者と治療者の二者関係において生じるものであるとする捉え方が主流となっている。

から検討する研究が、いくつか見られるようになってきている。そこで、治療者自身の空想について触れている現代の精神分析家の中から、米国在住の Theodore J. Jacobs と Thomas H. Ogden, そして Philip M. Bromberg の事例を取り上げて論じてみたい。Jacobs はニューヨークの精神分析家であり、患者と分析家の相互作用が精神分析作業の過程や結果にどのような影響を及ぼすかを明らかにしている (Jacobs, 1991)。Bromberg もまたニューヨークの精神分析家であり、現代対人関係論学派および関係精神分析学派の中心的役割を果たしていた。Ogden は西海岸在住の精神分析家であり、Bion などの Klein 派や英国独立学派の影響を受けているものの、Klein 派ではないと明言しており、特定の学派に属さず、精神分析理論を包括的に理解し、再構成している分析家と考えられる。それらの事例には、分析家にどのような空想が生じたのか、また空想がクライエントとの間でどのようにその中で展開していったのかについて、それぞれの分析家の理論の解釈とともに記述されている。そして、当事者だけが経験できる、セッションのまさにその場で空想することについての記述がなされている。3 者はともに治療者と患者の相互作用に注目しているものの、それぞれ違った部分に違った理論をベースに空想を扱っている。本論文では、これらの事例を通して、空想することによってセッション場面で何が起きているのか、それぞれの精神分析家がそのことをどのように捉えているのかを明確にし、空想することの治療的意味を検討したい。

1. Jacobs の内的体験

Jacobs (1991) は自分の直観や経験などを用いて治療を行うことを提唱しており、そのことを「use of the self」という言い方で表現している。Jacobs は自身の内的経験を利用することは、セッションで生じた交流を理解し、患者が治療において小さな進歩を遂げるのを助けるために、欠くべからず要素であると主張している。Jacobs (1993) は以下のように述べている。

私たちはみな、不安であったり、疲れていたり、何かに気を取られたりしながら、日々を送っています。私たちは、主として自分自身の関心事にかかわる在り方で、反応していることに気がきます。しかし、私たちの耳が適切に働き、よく傾聴している時、意味をもった構成要素から記憶や想像の断片が現れ、患者が伝達したことに対する反応を明確なものにするのです。このような経験から、他者を理解する能力とは、その個人を傾聴する能力だけではなく、私たち自身を傾聴する能力に拠っていることが教えられるのです。

以下では、Jacobs の著書 “The inner experience of the analyst” (Jacobs, 1993) の中の事例を通して、治療者が空想することの意味について検討していきたい。Jacobs は患者によって引き起こされる自身の身体感覚も含め、不快感、怒り、緊張など、さまざまな感情を Jacobs 自身の経験に還元し、分析している。そこには Jacobs が患者との相互作用に

においてどのように反応し、自身を傾聴する能力からどのような気づきを得ているのか、多くの示唆に富んだ内容が記述されている。事例の中から、まず治療の開始の部分を取り上げる。Jacobs は、治療者が普段のセッションで何気なく感じていることの詳細を記述しており、またその意味についても分析している。以下に事例の一部を引用する。

患者はV氏という38歳の独身の男性の弁護士で、私は新しいオフィスに移転し、いつもより緊張してV氏を待っていた。V氏はほぼ時間通りベルを鳴らしてやってきた。私は寝椅子の枕の上に紙タオルを置き、数秒の間にそれを整えると、突然心の中に作家のイメージが現れた。この作家は仕事を避ける手段として、半ダースの鉛筆を念入りに尖らせ、それらを一本ずつ机の上に並べるという方法を取っていた。私は、ドアに向かうのにぐずぐずしているために、この想念が心に生じてきたということに気づいたようだった。次に部屋に入ったV氏のスーツに目を留め、自分の衣服をちらっと見た私は、自身の父親や分析家がV氏と同様にある程度の上品さを持っているのに対して、自分はオーダーメイドの店の洗練された世界に入れない既製服の男であるという思いが悔しさの感情を伴って生じた。私は彼らと競争してきてはいなかった。さらに「英語で見る、アイリッシュ語で考える」という、何処かで聞いたようなポップスのフレーズが私の中に浮かんできたとき、私はそれが貶しの意味であると理解した。それは、V氏の非難の予期とある部分で彼との競争の表現であり、また輝くような仕立て服への妬みであり、V氏がユダヤ人であるのに、それを認めたがらないことへの私の気づきを表現したものであった。私はV氏との相互関係について考え、私はV氏への転移は、自身の父親とその他の男性の権威者に対する関係から引き出されたものであることを実感した。彼らにつぶされるという予期不安が生じて、私は対立するのを避けてきたが、こうしたことがV氏との間に生じていると捉えていた。畏怖を抱かせる男性との葛藤を避けるという、自分の古いパターンへの気づきとともに、私は自分自身の分析を通して父親に対する恐れをかなりな程度克服してきたことが思い起こされ、彼が引き起こすいかなる感情にも対処してV氏とやっていくことができると感じていた。

上記には、Jacobs がオフィスでV氏を待つところから、V氏がオフィスに入り寝椅子に座り部屋を見渡しているところまでの僅かな時間の Jacobs の心の動きが示されている。Jacobs はV氏との相互作用に関わることで、幾つもの自身の感情的な反応を経験し、これらの空想からV氏との間で生じていることに気づきを得ていた。まず、作家のイメージでは、V氏を迎え入れることへの抵抗を意識していた。そして、V氏のスーツと自分の衣服を比較するところからは、自身の劣等感や、これまで競争してこなかったことについて思いを巡らしていた。さらにポップスのフレーズが浮かんだことから、V氏から非難されることを予期し、張り合いや妬みなどを感じたうえで、それらをV氏への転移の文脈で捉え、自身の父親への恐れをある程度克服していることを思い起こし、Jacobs 自身の

心の安定が得られたと考えられる。

患者を待っているとき、その患者に対する個別の思いがその都度込み上げることは、治療者にはごく自然な経験として考えられる。患者と会うことになぜか気が進まないときや、逆に患者が来室することを心待ちにするときもあるかもしれない。また、これまでの文脈からその日の患者が語る内容や患者の感情状態を予測するということも考えられる。予感にも似たものを自身の身体感覚を通して感じることもあるといえよう。相談室に漂う空気を重苦しく感じる時もあれば、足が浮いているような感覚まで、その患者とのそのタイミングでのさまざまな出会いがそこに生じる。そして、まず患者が来室した際に、最初に入ってくるのは視覚情報としての患者の表情や患者の来ている服であると考えられる。現実にもそうであるかは別として、患者の表情から疲れた様子を感じ取ることもあり、さらに患者の着ている服から、患者はセッションの後にどこかに出かけるのかもしれないなどと、治療者はさまざまなストーリーを考える。患者と自分との衣服の比較は、Jacobs がV氏を転移の文脈で捉えているが故に Jacobs にとっての競争が浮かび上がるものである。場合によっては治療者が、自分とよく似たものを患者に求めることも考えられる。また比較そのものを意識しない、あるいは比較をすることがないこともあるといえよう。そのように患者と治療者の関係性や文脈によって、同じように患者の着ている服を見ていても焦点づけられるものは異なってくるものである。

ここで取り上げた Jacobs の一連の空想は、まずそこに意味のあるものとして捉える前提がないと、それらの空想は些末なものとして軽視され無視され、忘れ去られることが考えられる。Jacobs は、セッション開始のわずかな時間に生じた空想から患者との関係やその関係にまつわる自身の感情への気づきを得たのである。

次に示したのは、Jacobs が繋がりのない記憶の想起や連想から、V氏がオフィスの玄関のドアのメドゥーサの宗教的オブジェクトを見ていたという確信の感覚を得るに至ったプロセスについての抜粋である。

V氏が、長年V氏の兄が親しくしていたK氏が、最近熱心なユダヤ教徒になったことや部屋の調度品について語っているとき、私のなかに一見繋がりのない多くの記憶が浮かんできた。それは数年前の別の患者とのセッションの際のことだった。冬の朝、私は薄暗いなかで着替えをし、グレーのシングルスーツの上着と別のスーツのズボンを取り出してしまったのである。その分析時間のなかで、患者は私について多くの不満を述べた。私が的外れであるとか、重要なことを捉え損なっていると、患者は言った。どうした訳か、その日の私は自分自身が奇妙に思えた。後になって、ようやく自分の服装の何かがおかしいという患者の潜在知覚が、決定的に患者の連想に影響していたことがわかったのである。

この記憶の出現に従っていると、私の以前のスーパーヴァイザーであるチャールズ・フィッシャー博士のイメージが心のなかに現れた。フィッシャー博士は、潜在知覚の分野で先駆的な仕事をしている人であった。このとき、別の当惑する記憶が浮上

してきた。私は祖父のアパートを思い出していた。おそらく40年近く私はそのアパートについて考えたことがなかったが、今、その玄関ドアが浮かんでいた。そこには、明らかにメドゥーサが飾られていた。それから、今度は現在のオフィスのドアが浮かんだのである。するとそこにもメドゥーサが、貼り付けられているのが思い出された。けれども、そのドアは何度もペンキを塗り直されているため、ドアフレームから、メドゥーサは目立たなくなっており、このオフィスに初めて訪れたとき、私はこの宗教的なオブジェクトに気付いたが、かつて、この地区に忠実な家族が住んでいたにちがいないという考えがよぎっただけで、その後、この事柄のすべてを完全に忘れていた。

今、なぜこれらのイメージが生じるのかを思い巡らせて、突然V氏がドアのメドゥーサを見ていたと私は確信を得た。

Jacobs はV氏が潜在知覚によってそのオブジェクトが彼の脳に記録され、K氏宅の宗教的なオブジェクトに対する連想を通して彼がそれに言及したと考えており、Jacobs の直観は結果的に間違っていないかった。V氏はしっかりとは見えていないが、ドアフレームに何かを捉えたと語っていた。この宗教的オブジェクトは、V氏とJacobs の間で取り扱われてこなかったユダヤ人についてのさまざまな想念を思い起こさせていた。それはV氏がユダヤ人であることを否定していることや、彼にとってJacobs がユダヤ人であることが何を意味しているかなどであり、それらはJacobs の中で掴み切れていない部分であった。さらにユダヤ人であることが明らかなJacobs という名前にまつわる空想が続いていた。

Jacobs はこのセッションのなかで、V氏が子ども時代のトラウマティックな時期に触れるための援助に失敗したのは、Jacobs 自身の根底にある問題のためで、それは、Jacobs が、人生初期に経験した痛ましい無意識的な連想にまつわる不安な逆転移反応を塞ごうとする防衛だったことと振り返っている。以下にその抜粋を記述する。

6歳の頃、経済的な事情によって私の家族が強いられた極めて破壊的なものとして経験された引っ越しの記憶が浮かんだ時、私はオフィスの引っ越しによって、現状や、馴染んでいるものが乱されるという、意識化している不安よりも、さらに大きな量の不安が呼び起こされていた。私の不安はまた、私の崩壊家庭ゆえの数多くの引っ越しの記憶に関連し、そしてそれは、V氏とのセッションの中で引っ越しの話題が出てきた時に、明確になった。セッションでは、V氏の私に対する競争心の問題に焦点が当てられがちであったが、もし私の介入が引っ越しについてV氏が経験したことに焦点付けされていたならば、間違いなく彼は、次の素材へと道が開かれたであろう。

V氏が10歳の時、父親が職を失いその結果、小さなアパートへの引っ越しを強いられ、V氏は、深い屈辱感を味わった経験があり、この事実は、父親が完全な失敗者であり、そのため、V氏は私の新しいオフィスへの移転を、急に落ちぶれたためであり、

開業が失敗したためであると感じていた。このファンタジーは、この報告をしたセッションの日から、数日後に浮上したものである。

Jacobs は、V氏との競争や、それまでV氏と Jacobs の両者の間で探求されてはいなかったユダヤ人であるということを空想することは、彼自身の防衛に使用されたと振り返っている。Jacobs のこれらの防衛的な空想は、Jacobs が新しいオフィスでV氏を待っている時からすでに始まっている。そして Jacobs は、治療の始まりの患者と分析家の双方による空想がその後の進展に影響を与えることも、事例を通して示していたと考えられる。Jacobs は分析時間を振り返り、V氏との時間を Jacobs 自身に結び付けて熟慮することによって、最終的にV氏と Jacobs がともに過去に生じた子ども時代のトラウマティックな引越の経験を防衛していたことに気づいたのだった。

Jacobs の次から次へと展開していく空想の詳細に触れていると、一見すると自身の空想をすべて利用しているような印象を持ってしまう。しかし Jacobs は、「ある反応は全く個人的で特有のものであり、等しく役立つものではない」とも述べており、すべての空想が利用されるわけではないと考えている。すなわち Jacobs は、さまざまな自身の空想を治療的に利用できるものかどうかを、吟味しているのではないかと考えられる。Jacobs は、「自身を傾聴する能力」にこのような自身の空想を選別することも含めているように思われる。この自身を傾聴することには、逆転移反応が分析時間の間に意識に届くものではないという認識も含まれ、Jacobs は日常のなかで、セッションについて自由な振り返りをしており、そこから気づきを得ているとも述べている。また、Jacobs は胃が締め付けられたり、脈が速くなるのを感じたりという身体感覚から患者の攻撃性を感じ取るといったことがあると述べ、自身の身体感覚に開かれていることが必要となるとしている。

さらに、Jacobs はこのセッションを振り返り、次のようにも述べている。「分析の進展は、患者の抵抗のワークスルーと同様に、しばしば分析家の抵抗のワークスルーに拠っているということ、そして分析家自身の抵抗を克服する過程で、分析時間に瞬時に抵抗が生じたときに、その主観的な経験を用いることが、中心的な役割をするということです³⁾。」

2. Ogden のもの思い

Ogden (1997/2006) は、ドビュッシーが音楽とは音のあいだの空間であると感じていたことを引用し、精神分析における分析的対話を構成する話された言葉という音と音のあいだには分析家と被分析者のもの思いがあると述べている。「もの思い (reverie)」とは、もともと Bion (1962/1999) が使用した用語であり、「母親が乳児を愛するとき」「彼女の愛情は夢想 (もの思い) によって表現されている」というように、乳児の投影同一化の受

3) 抵抗のワークスルーとは、治療者が解釈と洞察を繰り返すことによって患者が抵抗を克服し受け入れていく過程とされているが、ここでは患者と治療者それぞれがワークスルーするということに記述されている。患者の抵抗のワークスルーは、治療者が自身の抵抗のワークスルーによって進展するというのが、Jacobs の主張であると考えられる。

け皿としての母親の機能や態度を表すものである。母親が泣いている乳児に対して、なぜ泣いているのかをあれこれ想像したり、またなだめたりすることである。Ogdenはこの「もの思い」の観念の中に、無関係に見える思考や、感情、空想、反芻的思考、白昼夢、身体的感覚などを含めて考えている。

もの思いの状態とは、精神分析家が自分自身をクライアントに利用されるように無意識的に受容的であろうとする態度そのものであり、「その人の分離した個人性を第三の主体に（部分的に）引き渡す」（Ogden, 1997/2006）ことを含んでいる。この状態はクライアントと精神分析家が「ある程度まで我を失う」という状態になるだろう。また、この第三の主体とは、それぞれの個別性はなく、「分析者でも被分析者でもない第三の主体性であるような主体のこと」（Ogden, 1994/1996）であり、「二人が同一に体験される単一の出来事ではなく、むしろ、非対称的に構築される、一連の意識的および無意識的な間主体的体験である」（Ogden, 1997/2006）。無意識的に受容的であろうとすることによってもたらされる治療者の空想は、たとえ見かけの上では無関係な思考であっても、分析関係で起こっている文脈の中で利用される可能性を含んでいる。

さらに、Ogden (1997/2006) は、もの思いを精神分析家の「パーソナルな創造と見なすのは誤りにつながる」とも述べている。そして、精神分析家もクライアントも「無意識の間主体性に貢献し、参与」しており、Winnicott (1960) の「ひとりの赤ん坊などいない」という言葉を言い換え、拡張して両者が別個には存在しないことを主張する。しかし同時に、精神分析家とクライアントが別々の個人であるということにも触れており、分析家は、個人性と間主体性との弁証法の複雑さに対して格闘しなければならないことや、そのパラドックスとともに生きなければならないということにも言及している。

以下では、著書『夢見の拓くところ』（Ogden, 2001/2008）より、見かけの上では無関係に見える空想を治療的に利用しているW氏（男性）の事例を引用し検討してみたい。

Wさんは「精神的にコントロールがきかない」ということがどんなに怖いことかと語っていた。Wさんは2回結婚し、2回離婚し、どちらの結婚でも妻の側に子どもを残しており、彼は子どもとひどく疎遠であると感じていた。セッションの中で彼が自分の「クレイジーさ」をすっかりさらけ出した唯一の相手が私だと話しているとき、私のところは、これからやってくる自分の50歳の誕生日についての思考へと「さまよって」いた。最近交わした友人との会話のなかで、半ば冗談で50歳になるという現実を信じないことによって「対処」していると「冗談」を言った場面を思い出していた。私は相当無理をしていた気がして、恥ずかしい気持ちになった。私は注意の焦点をWさんが言っていることに戻して、さらに分析関係の中で起こっていることの文脈で考えてみようとした。そこで、私はWさんに「自分のクレイジーさが恐ろしい反面、その自分自身の感覚を全く非現実的なものになっているため、それが自分の一部だと信じられないのではないかという気がする」と伝えた。Wさんは沈黙の後、分析を「やってもやらなくてもいいもの」のように言うとき、自分の「クレイジーさ」が遠い過去

のものや他の人に起こっていることのような感じがしたりするのだと言った。

私の解釈によるWさんの反応は、家族、分析、私への破壊的影響への責任感や罪悪感は反映されていないものの、彼自身の分裂排除されている精神病的側面の体験と結びついた恐れと悲しみの深さを、いくらか伝え始めていた。しかし、彼の「クレイジーさ」が彼の先輩、子ども、分析、あるいは私に対して及ぼした破壊的影響についての責任感や罪悪感の感覚は、そこに反映されていなかった。そして、もうすぐ私の恥ずかしさという感情が、識別可能な転移の要素になってくるかもしれない、と推測した。

上記の例では、無関係に見えるような空想として、Ogdenの中で自分の50歳の誕生日についての友達との会話が思い出されている。Ogdenはこの空想を「患者と私とのあいだで起こっていることについての私の体験をあらわす隠喩を無意識的に創造」したものとして考え、自分の感じ取ったものをW氏との分析関係の文脈に戻して、解釈を伝えている。

分析場面ではさまざまなことを思い巡らし、いくつもの空想が浮かんで消えていく。もの想いの状態にいるOgdenが、そのいくつもの空想の中から50歳の誕生日にまつわる感情や思考をW氏と関連づけることができたのは、すでにベースになる要因が存在していたもののように思われる。Ogdenの間近に迫っていた自身の50歳の誕生日についての思考と感情は、その頃にOgdenが会っていた多くの患者とのあいだですでに心に浮かんできていた。Ogdenは「それぞれの場合に、生成されてきたイメージや思考、感情、感覚は、個々の患者とのあいだで最も切迫していた意識的および無意識的構築物の特定の性質を強く反映し、それによって文脈づけられていた」と述べている。W氏とのセッションにおいても、同様の特定の性質がOgdenに感じられたのだろう。つまり、W氏とOgdenの間での特定の質として考えられるのは、W氏が分析を非現実的なものとすることで自分のクレイジーさを受け取らずに済み、Ogdenは自分の50歳の誕生日を冗談として信じないという、それぞれが自分のやり方で、現実を遠ざけていたことが、投影同一化の受け皿としてのOgdenに、この誕生日にまつわる感情や思考を浮かび上がらせたものと考えられるのである。Ogdenは、セッション中に、患者が分析にリアリティを十分に感じていないような感覚をもっていたとも考えられる。そのような感覚がもの想い体験としての一つの空想を浮かび上がらせ、「分析の間主体的第三者のなかでのそれまで名づけられていなかった（無意識的）体験との接触を得て、その体験を隠喩的な意味を創造するための道筋として利用した」といえよう。

さらにこのOgdenの誕生日にまつわる感情や思考には、50歳になることの悲しみと怖れを体験しないための防衛が生じていたことが含まれていた。「親しい友人が自身の乳がんの広範囲にわたる転移を知らされたのも、彼女が50歳の誕生日を迎える数日前だった。自分もいつか死ぬということを認めること、友人の死への深い悲しみを回避したいという私自身の願望に対する恥ずかしさを反映していたように思える」とOgdenは述べており、それは分析場面では漠然としか気付いていなかったことであった。このOgdenの悲しみ

と恐れはW氏の精神病的な側面との重なりを見せ、W氏はそれらの感情を伝え始めていたのだった。これはある種 Ogden がW氏に巻き込まれた状態で第三主体に自分を差し出し、そこで初めて感じることでできた感情なのではないかと考えられた。

Ogden は、「もの想いは隠喩である」と述べており、隠喩は患者の無意識的体験がどのようなかを心理的に表現したものであり、隠喩の働きに親しく精通していることを分析家の義務として挙げている。患者が語る言葉、あるいは表情や仕草、行動など隠喩はさまざまなところに含まれていることが想定される。もの想いが隠喩とするならば、W氏の例から示されたことは、分析家に生じる無関係な空想は患者の感じる思考や感情の隠喩として捉えられるということだろう。

「もの想い」という心的作業は、一見すると治療者が受容的に感覚を働かせることに重点がおかれているように感じられる。しかし、無関係に見えるような空想を隠喩として捉えることができるには、直観や感覚を駆使するだけでなく、母親が乳児のことをあれこれ想像するように、クライアントの体験していることを積極的に思い巡らし、空想がどういう文脈で生じたのか、空想が何を意味しているのかということを理解しようとするという能動的な心的作業の必要性があると考えられた。W氏の例で言えば、まず治療者の50歳の誕生日にまつわる感情や思考は他の患者との間ですでに出てきたものであり、それらがすでにデータとして残存し、そこからさらにどんな文脈でそれが出てきたのか、あるいは何を防衛しているのかと Ogden は考えを深め、W氏の悲しみや恐れに感情にたどり着いているように思われる。そこには、「個人性と間主体性との弁証法の複雑さに気づき格闘しなければならない」と Ogden が述べるように、隠喩を見つけ出すことは骨の折れる持続的作業とも考えられた。W氏の事例の無関係な空想からは、隠喩を見つけ出すためのもの想いは、治療の進展に大きく寄与することが示された。

3. Bromberg の解離とエナクトメント

米国の精神分析において新しい流れを創り出したメンバーの一人である Bromberg は、解離とエナクトメントを結びつけて論じる先駆けとなった精神分析家である。エナクトメントとは、いわゆる逆転移の行動化とも言われ、意識せずに起きた行動によって個人的な動機が表現されることである。また、この行動として表現されたものから無意識的な葛藤を振り返るというプロセスを意味しており、そこには治療者の言葉や仕草のような目に見えるものだけではなく、治療者から醸し出される雰囲気や沈黙、あるいは空想などの心的作業も含まれる可能性がある（岡野, 2002）。つまり、治療者が空想することは時にエナクトメントとしても捉えることができるといえよう。

では、Bromberg は解離とエナクトメントをどのように結びつけているのか。解離という現象は日常の適応的なレベルから病理的で不適応を起こすものまで、その程度もさまざまである。Bromberg が論じている解離とは、H. S. Sullivan から S. Mitchell に継承され Bromberg が臨床的にも発展させた多重の自己論がベースになっている。多重の自己論によれば、自己には「私」と「私でない」自己状態があり、解離された「私でない」自己状

態には患者自身も気づくことがなく、また語られることがないため治療者も触れることができない。しかし、患者と治療者の関係的コンテキストの中でエナクトされることによって、それらは現れてくるというのである。

我妻（2016）は「Bromberg の治療の焦点は、解離的構造の生じるプロセスにある」と述べており、そのプロセスは著書“Awakening the Dreamer”（Bromberg, 2006）の中のケイティという女性の患者の事例に示されている。Bromberg もまた Ogden と同様に、自身の空想をクライアントとの分析関係の文脈に戻しており、Bromberg の場合はさらに自身の空想を患者と共有している。その事例の一部を引用し、Bromberg の解説を参照しながら、治療者が空想することについて検討してみたい。事例はケイティの夢の報告から始まる。

分析の最終段階にいることをケイティと私の双方が理解し始めている頃、ケイティは次の夢を報告した。ケイティは母親が運転しているボートの後ろについてウォータースキーをしていて、彼女に続くようにして魚のヒレが水の中にあつたのを見た。彼女はウォータースキーのエキスパートであり、子供のころから持っていた溺れることの恐怖に既に打ち勝っていた。しかし、それが再び現れることをひどく恐れていて、夢の中において彼女はパニックに陥り出した。自身の後ろをついてくるヒレが、サメのものかイルカのものが分からなかったのである。

私は彼女から夢のことを聞くにつれて、自身が反対の方向へと引かれていっているように感じていた。彼女が夢の中で感じたはっきりとした不安にもかかわらず、私は落ち着いていて、一種空想めいた状態へと変化し、そこでは娘に初めての自転車の乗り方を教えていた。自転車の後ろに立って、私は娘が不安定な状態で座っていたシートの後ろを握っていた。彼女はころぶことにとっても神経質になっており、彼女自身が「いける！」というまで決して手を放したりしないと約束させた。一体いつの瞬間か分からなかったが、私は彼女を安定させる必要が無くなって、彼女は自身の力だけで自転車をこぐようになっていた。私は娘が「OK, 今よ！」と言ったのを覚えていない。（中略）しかし私は、手を放して彼女が通りを下っていく姿を見たその瞬間の記憶を明らかに感じている。思い出せないのは、私と共にいたその瞬間がまさに彼女がそれを言うよりも以前の時だったからである。娘と私は言葉を使わずに通じ合っていて、娘は自身の力で進むことができると、二人ともが感じられた瞬間だった。

Bromberg は娘と自分の情景からケイティのことへと意識が戻ってきたとき、どれほどの時間が経っていたのか分からなくなっていた。時間の感覚をなくしていたことから、夢から醒めた時のようなぼんやりとした状態でいたのだろう。そんな中、Bromberg はこの予期せぬ自己の状態の変化が何を意味するのかを自分に問いかけていた。セッション場面において、Bromberg のように解離が生じ患者のことを考えられなくなり空想が現れたとすれば、それは治療者にとってかなりインパクトのある稀少な経験となり、その意味を

問わずにはいられないことが考えられる。Bromberg は追憶の中で、娘と自分とのやりとりをケイティとの関係に重ねて思いを巡らしていた。しかし、それらから答えを見出すことはできず、むしろもっと分からなくなっていくような不明瞭さが、彼女との新たな局面に突入しているかのように思った。

Bromberg がどのようなタイミングでどのようにケイティに語ったのかは分からないが、自身の経験をケイティと共有すると、彼女は大いに興味を抱いた。Bromberg は、そんなケイティが Bromberg の空想に刺激を受けて何らかの連想を語るのではないかと想像していたのかもしれない。しかし、予想とは反して彼女は Bromberg の空想に焦点を当てるのではなく自分自身の夢にもっと深く潜り込んでいった。つまり、Bromberg がケイティのことが考えられずに反対の方向へと引かれたように、ケイティも同様に Bromberg のことが考えられずに空想的な状態に入り込んでいった。そして彼女は、Bromberg とともに自身の夢の意味を探究し始めたのだった。

ケイティはウォータースキーに乗っている自分自身や、彼女を追ってくる魚の「ひれ」を含めた細部にわたってまで彼女が経験したことを述べることができた。最初に彼女が発したのは不安であり、それは魚がサメなのかイルカ (doll-fin) なのか分からなかったためである。怖がることなく近づいてゆくことはできるかと私が尋ねたところ、彼女はうなずいた。そして、それに近づくにつれて笑い始め、これはただの普通の魚で多分マグロだと答えた。

doll-fin という彼女の連想を我々が探究していくにつれて、彼女は、母親が彼女を「人形 (doll)」であるかのように「母の可愛い子ちゃん」とならなければならないということに対して彼女がどれほど憎しみを抱いていたかについて、母親に決して察しられないようにすることがいかに死活問題であったかということを思い出した。少しずつ我々は、呼び起こされた私自身の私の娘と自転車の空想との関係を含んだ、終結という問題を巡って浮上してきたこの「死活問題」という抑圧され残っている恥ずべきところに引き込まれていった。これは、我々の愛着の絆が終結に持ちこたえてきていなかったといえるのかもしれない。夢見手としてのケイティは、彼女に未だ部分的に存在する分離不安を感じるような状況に入り込もうとしていた。

Bromberg はケイティにさまざまな質問を投げかけながら、彼女の夢の中の経験にできるだけ近づくように傾聴していたのではないかと考えられる。不安なケイティを見守りながらも Bromberg は彼女をゆっくり誘導し、ここでケイティの後を追ってきた魚の正体がただのマグロであることが明らかになる。このマグロの存在は、両者がケイティの夢を共有し、その時の Bromberg とケイティによって、「可変的に形作られたもの」(Lichtenberg, Lachmann, Fosshage, 1996/2006) であると考えられる。そして、この両者のやりとりは、「安全だが安全すぎない」関係性の中で繰り広げられるものであるといえよう。ケイティの状態を確認しながら促す Bromberg が傍にいることによって、彼女は魚に近づくことが

できたのだろう。一方、ケイティがその魚に近づくことが何をもたらすのかを予測することはできず、そこに危険性がないとは言いきれない。また、ケイティと Bromberg が二者の間に共に解離を生じさせる状態にあることやその経験を共有するといった関わりも、安全だが安全すぎない関係性をもとになされていることとして考えられる。

この一連のプロセスを通して浮かび上がってきたのが終結期における「死活問題」であり、ケイティが抑圧していた抱くことに恥ずかしさを伴う分離不安が明らかになっていった。その一方でケイティは、自分のことをもっと分かって欲しいという感情も併せ持ち、それは自身の夢に深く潜りこむという行為にも現れていると考えられる。ケイティにとって、未だに Bromberg を求める感情は意識することが困難であったと考えられる。Bromberg は、娘との自転車のエピソードを空想することから、ケイティの内的ドラマにおいてお母さんとして振る舞い、彼女の望みに従事していた自分自身と部分的に解離していたことに気づいたのだった。Bromberg は、ケイティの夢は過去と現在を橋渡しするように追体験されたものであり、この橋のために彼女が Bromberg と繋がることによって、そのきっかけを作ったのではないかと捉えている。

ケイティの夢もまた彼女自身から解離されていたものであり、Bromberg とケイティそれぞれの「私でない私 not-me」との解離のギャップが、それぞれの経験を両者が共有し橋渡しされていくにつれて、ケイティのペルソナ（「doll」や「shark」）が自己反省を受け入れていき、「私」というものに対する一貫した表現として同時に存在することがよりできるようになってきたのだった。

Bromberg は、本事例において何が生じているのか、また何がそうさせるのか、あるいは治療がうまくいくためにはどうなる必要性があるのかなど、詳しく説明している。その中で特に強調しているのは、二者的な解離のプロセスが治療的变化を促すことである。ケイティだけでなく治療者である Bromberg にも解離が生じる。そして、解離は決して個人の中で生じるのではないことも伝えている。この二者的な解離のプロセスを説明するうえで「夢見手 (dreamer)」と「浸透的 (permeable)」という言葉が多く用いられているが、それらは二者的な解離のプロセスが生じるための必要不可欠な視点になっている。本事例はケイティが夢を語ることから始まるのだが、ケイティが自身の夢だけでなく「夢見手」としての自身を持ち込んだことによって、Bromberg に解離が生じ、娘との自転車のエピソードを空想するに至ったと考えられている。すなわち Bromberg に空想を浮かび上がらせたのは、ケイティの空想性に刺激を受けた Bromberg の中の「夢見手」の部分が呼び起こされたからだというのである⁴⁾。Bromberg が自己状態の変化とともに空想の内容を

4) Bromberg は、自身の夢見手の部分が呼び起こされた際のことを、両者の頭の中にあるミラーニューロンが活性化し始めたのだと想定している。ミラーニューロンとは、イタリアのパルマ大学のリゾラッティのグループの研究によって、サルが他のサルの運動を自分の頭でモニターし、あたかも自分がやっているかのごとく心のスクリーンに映し出していることから名付けられた神経細胞である。その後実験によって、人間にもミラーニューロンの存在が明らかになっている。

紐解くことが、ケイティの私でない私の存在に触れる機会に繋がっていく。Bromberg が自身の経験をケイティに語り、今度はケイティが自身の夢に深く潜り込んだことも、Bromberg の空想性がケイティに刺激を与えたとも考えられる。本のタイトルにもなっている“Awakening the Dreamer”「夢見手の目を覚ますこと」とは、二者的な解離のプロセスを展開させていくものであると考えられる。

そして随所で使われている「浸透的」という言葉は、両者が解離された自己状態に接近するために、その必要性から述べられている。そのためには、治療者は患者とともにお互いの考えや経験を開けっ広げに共有することが求められ、それらのプロセスを経てこれまで感じる事のなかった経験に自己が統合していくというのである。しかし、治療者自身の空想を共有することには治療者がどこまでをどのタイミングで自己開示するかという問題が生じる。Bromberg はその難しさに触れた上で、その有用性を二者の関係性の中で見定めながらセッションは進んでいき、時にそれは痛みさえ伴うような努力となることを述べている。これは「衝突と交渉 (Collisions and Negotiations)」と表現される、二者の関係において両者のやりとりのプロセスを経てなされるものである。

さらに Bromberg は、「個人的」と「専門的」の間にある境界線が「浸透的」である必要性についても述べている。この場合の「専門的」とは、セッション場面における治療者や患者としての役割を示しているのではないかと考えられる。本来「個人的」と「専門的」は、どんな場面においても切り離せるものではない。両者の間にある境界線が浸透的になることは、「専門的」な役割に注意が注がれている際には見ることでできない自己の側面に気づく可能性があることを意味する。Bromberg は自身の娘とのエピソードを空想することを、「個人的」でもあり「専門的」でもあるものとして捉え、それらの経験から自身の解離されていたものに出会い、終結期の二者の間で生じている意識化されていない問題が浮かび上がったのである。

また、Bromberg は解離的なギャップというものを、眠っている状態と起きている状態に見出し、それらの間が「浸透的」であることによって、「夢見手」がそのギャップに入り込み、新しい関係性の意味を共に創り上げていくことができると述べている⁵⁾。Brom-

Bromberg は、マインド・リーディングが「他者の特定の精神状態、たとえば自身の知覚や目的、信念、予測そして好みなどを代理する活動である」(Gallese & Goldman, 1998) とすれば、それらはミラーニューロンの機能であるシミュレーション理論によって説明されているとしている。シミュレーション理論によると、「他者の精神状態は彼らの観点に合わせることによって代理される。」というのである。このように Bromberg は、自分と娘との自転車のエピソードを空想するに至ったことについて、脳神経科学の観点から述べている。

- 5) Bromberg はこの現象を、「母親と幼児を一体化させるような共有されたもの想い (reverie) の状態として夢という言葉を用いていた Bion の概念 (1962) と鳴り響くところがある」とし、「また、内的経験のサブシンボリックなチャンネルとシンボリックなチャンネルの間におけるマルチレベルな繋がりを通して、ある人の内的な表現が他の人のものと繋がる時に、どのように共有された空間が作られるかということを明瞭にしてきた Bucci の認知的な調査 (1997, p. 220) ととも共鳴する。(p. 20)」ものであると述べている。

berg が「夢見手」と表現している状態とはこの眠っている状態と起きている状態の間を行き来して、両者に橋をかけることができる存在なのだろう。このことが示しているのは、眠っている状態とは解離された状態であり、解離された状態に接近するための方法が夢見手の中途覚醒な状態を両者が相互に持ち込み、その両者の多くの異なった自己状態の間における相互交流によってなされるのではないかと考えられる。

目の前の患者のことが考えられず個人的な空想が生起されるという、もしもそんなエナクトメントが生じたとすれば、それは違和的であり治療の邪魔になるものとして捉えられかねない。大抵の治療者は、そのような心の動きを制限しようとするだろう。Bromberg によれば、エナクトメントはそれぞれの互いに対する衝撃の破片であり、それは無意識によってもたらされる両者の間で起こった生々しい素材として吟味すべきものである。本事例では、Bromberg がケイティの夢によって自身の「夢見手」の部分が目を覚まし、エナクトメントによって自身の状態と空想から情報を得て、解離的なギャップに気づくことができたとき、ケイティの「私でない私 not-me」をケイティが受け入れ、新しい両者の関係が共創されていったプロセスが描かれていた。治療者が空想することは、共有された空間を作り、そしてエナクトメントが何を表現しているかに気づくための重要な資源として利用できることが考えられた。

4. 空想することの治療的意味と理論的背景

以上、3人の現代の精神分析家による事例を取り上げ、空想することで何が起きているのかを検討してきた。3人の治療者はそれぞれが異なった方法で自己を用いて空想しており、その方法には、それぞれの精神分析学派の影響が見られた。Jacobs は Freud 学派の伝統を、Ogden は対象関係論の伝統を、Bromberg は対人関係学派の伝統をベースにしながら、それぞれ独自の方法で分析的相互作用 (Mitchell, 1997) に参画していることが伺われた。そこで、3事例を比較した上で、空想することの治療的意味を理論的背景とともに考察するために、空想の現れ方や取り扱われ方など、空想に関するさまざまな側面を比較検討してみたい (表1)。

Jacobs に見られる空想は、患者との関わりの中で自身が感じた微細なことにも敏感に反応し、その反応を自身の過去と結びつけて、逆転移という文脈で空想を捉えている。つまり、Jacobs 自身の過去の経験とそれらに伴う感情を想起し、V氏の苦悩を理解しようとしている。事例では、V氏との過去の経験がシンクロする様子が見事に描かれている。治療者自身の抵抗を分析し続けることが、いかに分析の進展に寄与するのかが主張されている。

Jacobs の空想の内容が過去の経験であるのに対して、Ogden と Bromberg の空想は過去に限定されているわけではなかった (Ogden, 1997; Bromberg, 2011)。また、Ogden と Bromberg の論考は、治療場面における分析家自身の空想の使用という行為自体と、そこに Bion のもの想いがベースにあることが共通していたが、互いに論及し合うことはなかった。しかし両者は、患者の中にだけ患者の在りようが位置するわけではなく、患者と

表1 3事例における治療者が空想する際の態度の選択

分析家(患者)	Jacobs (V氏, 38歳独身男性, 弁護士)	Ogden (W氏, 中年男性)	Bromberg (ケイティ氏, 女性)
事例における空想の記述	ある分析時間を通しての内的経験としての空想(過去の Jacobs 自身の経験)	無関係な一つの空想(最近の Ogden 自身の出来事)	関係が示唆される個人的な一つの空想(過去の Bromberg と娘との経験)
空想の現れ方とその際の患者と分析家の状態	自由連想のように考え続け、常に敏感に自身の中に思い浮かぶことに反応	「さまよって」いる感覚のもの想いの状態で、両者は浸透的	自身のイメージが自分の考えに入り込む。時間の感覚をなくして両者は浸透的
空想に対しての理論的理解	逆転移に集中抵抗のワークスルー	もの想い 第三主体 投影同一化の受け皿	解離とエナクトメント 多重の自己 関係性
空想の患者への自己開示	していない	解釈にして間接的に伝えていることになる	空想を患者と共有
個人的な空想	ある反応は個人的で特有なものがあり等しく役立つものではない	どのようなもの想いも個人的な逆転移と考えない	言及されていない

治療者の自己状態がそれぞれの空想やもの想いを通して相互に浸透し合い、影響し合っているということを、主張していることには違いがないように思われた。Ogden の言う第三主体とは、患者と治療者の解離した一部によって相互的に形成されるものであり、彼はある程度まで我を失うという言い方をしており両者は浸透的であることが想定される。一方、両者の関係性や両者の間で生じていることを知る手掛かりとして、第三主体はそれらを外側から見るために必要な存在として考えられる。Bromberg の事例においても、患者と治療者がそれぞれに解離した状態を経て、覚醒水準が戻ったところでその後のやり取りが展開していく。それらは捉え方に違いはあるものの、プロセスには類似した点がみられる。

そこで、Ogden と Bromberg が治療場面で生じる分析家の空想の使用について説明している際の強調点から、それぞれの特徴と相違点についてさらに検討してみたい。吾妻(2011a)は、Bromberg を含め関係精神分析の分析家と Ogden の違いとして、「分析家の無意識を大切にする姿勢」は両者の「共有する感性」であるとした上で、「相互交流におけるバランスの程度」が違いとして考えられる点と述べている。Bromberg は分析家の空想を患者と共有することもそうであるが、「衝突と協定」という言い方で表現されているように、患者との今その瞬間のやり取りがあってこそ、患者の変化が促されるものであることを論じている(Bromberg, 1996)。

本論文で取り上げた3事例に留まらず、Ogden と Jacobs は自身の空想を開示することには慎重であり、稀にしか行わないのに対して、Bromberg は患者と治療者自身の空想を

共有することに治療的意味を見出して、行っている。ここに吾妻の言う「治療的バランス」の違いがみられる。つまり、患者と分析家の相互交流の場に自身の空想を乗せる Bromberg に対して、Ogden はどのようなもの想いでも個人的な逆転移としないとは述べてはいるものの、実際の治療に自身の空想を活用することについては、解釈がもし自分をなだめるためのものと感じたなら差し控え、思い留まっている（吾妻、2011a）。そもそも Ogden はもの想いを投影同一化の受け皿として治療者が自分自身を提供することであると捉えている。また Mitchell（1997）によれば、Ogden は分析家と患者の役割の中にある差異を曖昧にし、分析的体験が相互的になることを許容することに危険性を感じている。それは、Bromberg が個人的と専門的が浸透的になる必要性を述べていることとは、逆の治療的スタンスである。このように、ある局面において Ogden と Bromberg の空想が生じている状態が類似していたとしても、それぞれが自身の空想をどう捉え、どう扱うかについては、異なった理解をしている。

また、Jacobs と Ogden に共通した点が考えられる。Jacobs が雑念や些細な自身の反応から治療者の抵抗を明らかにしていくように、Ogden もまた同様に無関係と思えるような思考でさえもの想いとして捉え注目しているところは、自身の抵抗に気づく手がかりにしているようにも思われる。すなわち、Ogden も Jacobs と同様に両者は空想の範囲を広くすることで、前面に出ることがない抵抗を取り逃がさないようにしているというようにも考えられるのである（福本、2013）。

このように、セッション場面で生じている 3 人の精神分析家の空想するプロセスや空想への態度には類似した点を見出すことができるが、どの理論を使用して説明するかによって、自身の空想の治療的意味は、それぞれの分析家の理論的背景と個人的感性によっても捉え方が異なることが明らかになった。Jacobs は抵抗のワークスルーとして、Ogden はもの想いとして、Bromberg はエナクトメントの意味を知る手がかりとして、それぞれが空想の治療的意味を見出している。しかし、共通している点も多くみられる。三者は治療者自身の空想を、患者からの無意識的コミュニケーションへの反応として捉えていた。そして、自身の空想は決して患者と切り離せるものではなく、患者と相互に連動して生じているものであることを強調していると考えられた。それらのプロセスを経て、治療者が患者のより深い理解を促すことができ、患者と治療者の成長、治療の進展に貢献する可能性を三者は述べていた。そのためには、治療者がそれぞれの方法でいかに自分自身の内的世界に親しみ、自分自身を有効に使えるか、そしてそれは自身の感覚や直観そして洞察を駆使して、初めて可能となるものであると考えられるのである。

6. まとめ

3 人の精神分析家の空想するプロセスや空想への態度には、ある部分で類似する点を見出すことができたが、それぞれの理論的背景によって治療的意味は異なっていた。

また、本論文において選択した事例は、熟練の精神分析家の頻度の高い寝椅子を使用した事例であり、日本における週 1 回の対面のセッションとは大きく異なっている。前者は

後者と比較して、より内面を深く探求することができる設定である。そのため、治療者が空想する方法にも違いが見られる可能性がある。しかし、事例を通して、空想することには3人の精神分析家のみならず、ある部分ではどの治療者においても類似した経験や方法をそこに見つけることができると考えられた。セッション場面で治療者が空想することは通常の営みであり、Jacobsのように自身の些細な行動や直接関係のない思考などに心が留まることなくとも、空想の連続性は誰もが経験していることである。また、Ogdenが述べているような患者に利用されるために無意識的に受容的であろうとするもの想いの状態は、治療者の治療的態度として考えられる。さらに、Brombergのように自身の空想に注意が向き、目の前の患者のことが考えられなくなるような経験をしないとは限らない。また、夢や空想の話をする際、両者の間で流れる空気感が現実の話をしている時とは違ったモードに入りこんでいると感じる時もあるだろう。3人の精神分析家の事例では、空想することの何に注目しどう理解するのかによって、空想することもセッションの捉え方も異なったものになることが示された。つまり、空想することは目立たずに理論と実践を繋げる役割も担っている。それらはセッションで生じていることを理解する手がかりとして、さまざまな相互作用の見方を提示するものであった。そして、3人の精神分析家それぞれの精神分析学派の理論の伝統と自身の実践から得た豊かな治療のスタンスが伺えた。

本論文では、事例を通して、セッション場面でむしろ制御してしまうことが多いと思われる治療者自身の個人的な空想が、治療に貢献することが明らかになった。治療者が空想することは患者が目前にいるからこそ、またその時その場のタイミングがあるからこそ生じている現象であり、些末なものや無関係だと思われる空想にも目を向けることが有用であることを改めて認識することとなった。このことは、新しいケースの見方を提示することができ、患者と治療者の非言語的コミュニケーションの可能性を広げることに繋がると思われる。しかし、それは簡単なことではない。3人の精神分析家の事例にも見られるように、個人的な空想が治療に活かされるには、自身のあらゆる感覚を総動員するという自己の使用とともに、相互作用に注目しパズルを解くような複雑な内的作業によって初めて可能になるものであると考えられる。

一方、本論文における3事例の比較検討から考察されたものは、現代の精神分析家が空想することの一側面として限定されたものでもある。治療者と患者の相互作用はその組み合わせの数だけ存在し、その場のタイミングがプロセスを変えていくことにも繋がり、さまざまな展開が考えられる。現代の精神分析家にとって空想することとはどのようなものであるかを明らかにするためには、今後さらに異なった事例も含め検討していきたい。

文献

- 吾妻荘 (2011a). 関係精神分析の成り立ちとその基本概念について. 関係精神分析入門—治療体験のリアリティを求めて—. 岩崎学術出版社. pp. 20-52.
- 吾妻荘 (2011b). 関係精神分析の治療技法. 関係精神分析入門—治療体験のリアリティを求めて—. 岩崎学術出版社. pp. 220-245.

- 吾妻莊 (2016). 現代米国精神分析とウィニコット. 心理相談研究, 17, 神戸女学院大学.
- Berger, D. M. (1987). *Clinical Empathy*. 角田豊・竹内建治・安村直己・西出克泰・藤田雅子訳 (1999). 臨床的共感の実際. 人文書院.
- Bion, W. R. (1962). *Learning from Experience*. Heinemann Medical. 福本修訳 (1999). 経験から学ぶこと 精神分析の方法 I ——セブン・サーヴァンツ. 法政大学出版局. pp. 3-118.
- Bromberg, P. M. (2006). *Awakening the Dreamer: Clinical Journeys*. Mahwah, NJ: The Analytic Press. London.
- Bromberg, P. M. (2011). *The Shadow of the Tsunami and the Growth of the Relational Mind*. Routledge. 吾妻莊・岸本寛史・山愛美訳 (2014). 関係するところ——外傷, 癒し, 成長の交わる場所. 誠信書房.
- Bucci, W. (1997). *Psychoanalysis and Cognitive Science: A multiple code theory*. New York: Guilford.
- Freud, S. (1910). *Die zukunfftigen Chancen der psychoanalytischen Therapie*. 小此木啓吾訳 (2007). 精神分析療法の今後の可能性. フロイト著作集 9. 人文書院. pp. 44-54.
- 福本修. (2013). 書評: T. H. オグデン著 大矢泰士訳『もの想いと解釈 人間的な何かを感じとること』.<http://home.u02.itscom.net/fukumoto/hp/shyohyo/08ogden.html> (2020年12月19日最終確認)
- Gallese, V., & Goldman, A. (1998). *Mirror neurons and the simulation theory of mind-reading*. Trends in Cognitive Science, 2, 493-501.
- Greenson, R. R. (1967). *The Technique and Practice of Psychoanalysis. Vol., I*. International Universities press New York.
- Jacobs, T. (1991). *The Use of the Self. Countertransference and Communication in analytic situation*. Madison, CT: International Universities Press.
- Jacobs, T. (1993). The inner experience of the analyst: Their contribution to the analytic process. *The International Journal of Psychoanalysis*, 74, 7-14.
- Lichtenberg, J. D., Lachmann, F. M., & Fosshage, J. L. (1996). *The Clinical Exchange: Techniques Derived from Self and Motivational Systems*. Hillsdale, NJ: The Analytic Press. 角田豊監訳 (2006). 自己心理学における臨床と技法. ——臨床場面におけるやり取り——. 金剛出版.
- Mitchell, S. (1997). *Influence and Autonomy in Psychoanalysis*. Hillsdale, NJ: Analytic press.
- 中谷桂子. (2021). 心理臨床家が空想することの意味についての一考察. 大阪経大論集 71-5, 大阪経大学会.
- Ogden, T. H. (1994). *Subjects of Analysis*. Northvale, NJ: Aronson. 和田秀樹訳 (1996). 「あいだ」の空間 精神分析の第三主体 新評論.
- Ogden, T. H. (1997). *Reverie and Interpretation: Sensing Something Human*. Paterson Marsh Ltd and Jason Aronson. 大矢泰士訳 (2006). もの想いと解釈 人間的な何かを感じとること. 岩崎学術出版社.
- Ogden, T. H. (2001). *Conversations at the Frontier of Dreaming*. Jason Aronson. 大矢泰士訳 (2008). 夢見の拓くところ. 岩崎学術出版社.
- 岡野憲一郎. (2002). 中立性と現実 岩崎学術出版社.
- 岡野憲一郎. (2015). 解離新時代 岩崎学術出版社.
- Orange, D. M. (1995). *Emotional Understanding: Studies in Psychoanalytic Epistemology*. New York: Guilford Press.

- Stolorow, R. D. & Atwood, G. E. (1989). Unconscious and Unconscious Fantasy: An Intersubjective Developmental Perspective. *Psychoanalytic Inquiry*, 9 (3), 364-374
- Winnicott, D. W. (1960). The theory of the parent-infant relationship. *International Journal of Psychoanalysis*, 41, 585-595.
- Witham, A. (1999). Dreaming and daydreaming. Johnson, S; Ruscynski, S. (eds.). *Psychoanalytic Psychotherapy in the Independent Tradition*. H Karnac Books. 夢見ることと白昼夢を見ること. 倉ひろ子訳 (2007). 精神分析的な心理療法の現在 ウィニコットと英国独立派の潮流. 岩崎学術出版社. pp. 141-155.